
僕らの誓い

絢花李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの誓い

【Zコード】

Z5747S

【作者名】

緋花李

【あらすじ】

争いもなければ平和もないこのセカイ。

いや、平和なのかもしれないが、人間たちは何かに恐れてる。 そういう何かに

帝都でのんびりと傭兵をやっている『ロア』。 基本的な仕事は雑用ばかり。 戦いは本当に稀だし、旅の護衛も最近は滅多になくなつた。 それは争いがないセカイになりつつあると言う事だ。

騎士団が消え、王がいなくなつた城はただの飾り。 国を治めるの

は政府の人間。政府が何をやろうと、民衆の知つたことではなかつた。

そんな日常に突然厄介事が舞い込んでくるとは 誰も気がつかなかつただろう。『ロア』以外は。

この物語は私のブログにも載せています。こちらに載せさせて頂いている物は手直しをしてあります。

第一話（前書き）

新連載『僕らの誓い』は様々な絵師様からキャラクターを提供していただきました。

これから彼らをうまく動かせるかどうかは分かりませんが、全力で取り組ませていただきたいと思っています。

よろしくお願いします！！

第一話

「まてえ！ ここにやろおお！」

肩で息をしながら薄暗く狭い街路を駆けていく。乾いたレンガでできた石畳が、俺たちの靴の下で大げさな音を立てて鳴る。狭いから、音が反響してるんだ。

俺の目の前にはちつこい犬。

なんで犬を追っかけているのかって言つと、今回の依頼はこの犬の捕獲だからだ。

物凄く稼ぎは少ないけれど、しかたがない。俺は依頼主の顔を思い出して少し消沈した。

そうだ、これも食うためだし。

「あの犬つこる……捕まえたらみじん切りにしてやる……」

「よせよ、リリー。一応あれ、依頼品だからな？」

「わかつてんけど！」

隣で肩まで届く銀のセミロングの髪を振り乱して走るリリーが網の細い柄を折れてしまいそうなほどに強く握っている。外見はか弱い美少女に違いないのだから、もうちょっと女らしくすればいいのに。

それにすっげえ短いスカートも……あんまり乱暴に走ると……その。

そうそう、リリーは俺の相棒で、本名は『リリーシャ』という。なんか長いから俺は『リリー』って呼んでるけど。もともと気が長い方ではない彼女はこの犬を追っかけまわすという単調な仕事に飽き飽きしているはずだ。

いつ魔術を発動させるか……それを考へると胃が冷える。

俺がそんなことを考へている間に犬はちつさい隙間に入つてしまつた。

ここは流石に人は入れない。

「あー！ もうなんなの！？ 犬のくせに！！」

リリーはそう言い捨てる手で構えをとつた。……て、いやいや
まずい！

「 古の神よ。我に 」

「わー！ 待て！ 落ち着け！！ ここ街ん中だから！ 魔術発動
させたらマジでやばいからつ！！」

慌ててリリーの詠唱を止める。

たぶん、さつきの詠唱からして捕獲系の魔術『アジューン・ゲー
ト』だろ？ 魔法陣にいくつもの柱を立て、その範囲内から敵を逃
がさないようにするための魔術だ。範囲が馬鹿でかくて、とにかく
危ない。なにもない平原なら別に構わないが、街中、となると話は
別だ。下手をすれば、家の中とかに柱が立つて、破壊するかもしれない。
……ちなみに名前がまんまのは気にしない。なぜなら、魔術
の名前は彼女が決めるからだ。

俺たち人間は、魔術のことは知らないし、使えない。

使えるのは『エルフ』と、そのエルフの血を譲る『ハーフエルフ』
だけだ。

リリーはハーフエルフなのだが、自分では断固として『人間』だ
と言い張っている。

……別に、ハーフエルフが駄目とかじゃないのに、なんでそこまで嫌うのが俺には分からない。

詠唱を止められたリリーが不満そうに俺を見上げてきた。そして、
唇と尖らせて腕を組む。澄んだ青の瞳は釣りあげられ、ものすごく
苛立つているっぽい。

『『アジューン・ゲート』使えば確実に捕まえられると思つんだけ
ど？ このままずっとあの犬つじろの尻尾追うわけ？ 無理！
絶対無理だつて！！』

そう言つてリリーは近くにあつた石を思いつきり蹴り上げた。石
はものすごいスピードで飛んでいき、犬が入つて行つた隙間にうま
く滑りこんだ。

そして。

「きやん！！」

……すげー嫌な声を聞いた。

どうやら石が犬に当たつたらしい。

いや、俺たちが追いかけてる犬以外にもこの街には犬がたくさんいる。きっと他の犬にでも当たつたんだろう。そんなうまい具合に犬に当たるわけがない。そんなことがあつてたまるか！！

だが、リリーは目を凝らして、その鳴き声がした方を凝視した。そして、今まで仮面だったのがまるで夢であつたかのようにかわいらしい少女の笑みになる。

「よつし！！ 当たつたあ！！ 行くわよロア！！」

「……嘘だろ、マジかよ……」

俺は少しだけ肩を落としながら首を振った。

ハーフエルフのリリーは物凄く視力がいい。

エルフってのは、人間には不可能且つ理解不能な技術、能力を持つ。魔術もそうだが、リリーのようになると、人間では絶対にあり得ない視力を持つ者がいたり、耳がものすごく良かつたり、運動神経がすごかつたり、知能レベルが半端なかつたりと、とにかく凄い。

だから、たぶんリリーの言うとおり、あの犬に当たつたのだろう。ああ。どうしよう。依頼主に怒られないだろうか……

俺は大きな溜息をついて先に駆けたりリーの背中を追つた。

「「」迷惑をおかけして、ほんと「めんなさいねえ」

依頼主はお得意様だつたりする。丸々と太つたご婦人で、こういうちつこい仕事をよく俺たちに押し付けてくるのだ。……ある意味営業妨害なのではないだろうか。

「いえ、またお願ひします」

「……一度と頼まないでよね」

田を回した犬を手渡しながら形だけの礼儀を述べた俺の後ろでリリーが小さく呟く。俺は少し小突いて「我慢しろ」と田だけで言った。

少し膨れたリリーはツン、とそっぽを向いてしまう。

「それにしても大変ねえ、傭兵さんも。お仕事、減ってきてるんでしょう？」

「まあ、そうなんんですけど」

心から言つてねーなこの人。

犬を撫でながらそう言つたご婦人に俺は苦笑いを返した。

ここ最近、帝都で国王が死に、それを機に……なのかはよく分からぬが戦争が終わつた。国王の代わりに政府が権力を握つたらしいが、何一つとして変わつたところは無い。たぶん、これからも変わらないのだろう。それに、変わつたところで俺達には関係ない。正直なんで戦争が起こっているのかもよくわからないまま俺たちは戦場に駆り出されたりしていた。

どこの国とどこの国が争つているのか。どうして争つているのか。何が原因でそうなつたのか。

ま、今となつては関係ない話だ。

そんな事を思いながら婦人の長話に耳を傾けていると、急に婦人の目が丸くなつた。

何事かと首をかしげると、ぐい、つと後ろから髪を引っ張られる。

「いつて！？ ちょ、リリー！？ な、何してんだよつ！？」

「うつさい！ 田の前をちらちら……」

ぶつぶつと何かを呟きながらリリーはす、と短剣をとりだした。

……まさか。

「待て！ ちょい待て！ なんでそうなる！？ 落ち着け」

「一部分だけ伸ばしたって何の意味のないでしょ！？」

言つや否や俺の返事を無視してリリーは俺の髪の根元に勢いよく刃を滑らせた。

ぶつつりと髪が切れる感触が伝わってくる。
途端、頭が軽くなつて俺は少しよろめいた。

「ほら。これですつきりした」

振り返つた俺に満足げに言づりリーが俺の黒髪を握りしめて笑う。
一部だけ腰まで届くほど長かつた髪が、弱弱しく握られているの
を見て、俺は何だかむなしくなつた。

「あらあ、いいじやない！ そっちの方が男前よお」

「…………」

流石に声も出ず、俺は左右を女に囲まれて黙り込んだ。

第一話

「ん？ なんだロア。髪切つちまつたのか？」

「せつかく長かつたのに勿体ねーな」

婦人のとこから仕事場兼自宅に帰ってきた俺を迎えたのはそんな

一つの言葉だつた。

後ろ手にドアを閉めながら溜息を吐く。

「うつせ。イメチエンだよ」

「どうせリリー・シャにでも切られたんだろ」「

笑いを含んだ声音。少しイラッときて俺は思わず眉間にしわを寄せる。そして少し睨むようにして声の主を見た。

俺の目に映つたのは依頼を受けるために作られたカウンターに腰を下ろす綺麗な若草色の髪をした男。こいつはここ メルスタリオンの仲間、ルイス。整つた顔をしているのにニヤけたような笑みのせいで全部台無しだ。

切れ長の銀の瞳を細めたルイスを見るとなんか脱力する。こいつの女つたらしがあからさまに見えるからだ。俺は大きな溜息をついてうなだれた。

「いーだろ別に。俺の髪なんだから」「

「ま、そりやそうだ。正直すつきりしただろ？」「

「.....」

確かにその通りなんだけど。

「でもまあ、ルビアン夫人の依頼、お疲れ。オレあの人苦手なんだよなあ」

ルイスの隣でカウンターに背を預けながら思い出したように言った男に俺は肩をくめた。

「それ、その人の仕事終えてきたやつの前で言つことか？ つーか俺ら昨日も仕事に出てたんだから、普通マイスヒルイスの番だろ？」「違ひねえ」

そう言つて盛大に笑つたのはルイスではない。ルイスとまつたく同じ顔をしている男 マイスだ。

まあ簡単に言つとこいつらは双子。

マイスは笑いを引つ込めるルイスと同じ若草の髪をぐしゃぐしやと搔いた。

「だつてあの人オレ等のこと完全にメイドとか家政婦とかだと思つてるつぽくないか？ 賴んでくる依頼は今日みたいな『犬探し』とか『物探し』とかしまいには『庭の掃除』だ。オレたち傭兵を何だと思つてんだよあの人……」

「でも依頼を寄こしてくれるだけありがたい。そのおかげで食つていけるんだから」

俺は婦人から受け取つた金の入つた袋をマイスに放つて預けた。そして二人を通り過ぎてカウンターの左手にあるドアを開く。

「それ、父さんに届けておいてくんない？ 俺、走りすぎて足ぱんぱんなんだわ。部屋で休んでくる」

二人に視線を送りながらそう言つて俺はドアの向こうへ 僕達の部屋がある一階へと続く階段がある少し長い廊下を歩きだした。

もうとつぐに田は落ちてテーブルには温かい食事が並んだ。リリーに部屋から引っ張り出されて連れてこられた俺はとりあえずイスに座り、スプーンをくわえてぼーっとする。リリーに叱られてしまふかもしぬないが、何もする気が起きない。

あー眠い。すっげえ眠い。

俺の隣のイスが定位置のルイスがパンをかじつてリリーを一瞥した。

「んで？ なんかイラついたから切つちまつたのか？ あんだけ長い髪はある意味珍しいのに」

「何？ なんか文句ある？ ていうか物食べながらしゃべんな！」

もぐもぐと口を動かしながら言ったルイスにリリーの怒声が飛ぶ。でも俺の耳には入っては抜ける感じだつた。3時間くらい自分の部屋で仮眠をとつていたから頭がまだぼーっとする。視界もなんだかぼやけている。

俺は向かい側に座り、ルイスを睨んでいる少女をぼんやりと見た。リリーはあんな性格だが、メルスタリオンのメンバーの中ではいちばん料理がうまい。そこはやっぱり女なんだよな。

そのリリーが作った飯はやつぱつまい。でもまだ頭が重い所為か食事がうまく喉を通らなかつた。

「どうしたんだいロア。随分眠そうな顔をしているね

そんな俺を見かねた父さん 優しい栗色の髪を少し長くして緩く結び、シアンのローブを身にまとつたメルスタリオンの社長のティオがスプーンを置いて俺に笑いかけてきた。

眼鏡の奥の鳶色の瞳が優しそうに細められたのを見て俺は曖昧に返事を返す。

リリーが「ごちそうさま」と手を合わせて席を立つた。そして食器をキッチンのシンクへと持つていく。そして食器を洗いながら子供に言つよつやかな口調で言つた。

「まだ眠いんでしょ？ 早くご飯食べちゃつてよ」

そんなリリーの背中横目で見てマイスが小声で呟いた。

「……少なからずリリーシャのせいもあると思うぞ?」

「ハア！？ ビーウー意味、マイス！！」

耳聴く聞きとつて勢いよく振り返つたリリー。そんなリリーを見てルイスが大声をあげて笑つた。

「マイスの言葉のとーりだろ？」

「アンタは黙つてなさい、ルイス！ アンタのその口調むかつくんだつての」

「ああ！？ なんだよそれ！？」

ああ。‘るるせー。

でもおかげで意識がはつきりしてきた。

とりあえずリリーの怒りに油を注がないように早く食っちまおう。
俺は三人は完全に無視してスープを口へ運んだ。

リリーとルイスの喧嘩はしばらく続いた。もちろん殴り合いなんてことはしないが……リリーの場合は特別だ。危ない。いろいろと。前にも何か話した気がするけど……リリーはハーフエルフだ。つまりは。

「喧嘩で魔術を使うなって……」

「うるさい！！ もう……めんどくさいな」

ダイニングの椅子に行儀悪く座り、長い銀の髪を搔き上げたりりー。そんな彼女を見て俺は大きな溜息を吐いた。

喧嘩の終止符はリリーの魔術の発動を俺たちが阻止したことによって打たれた。

家ん中で魔術を放たれてはたまつたものではない。物が壊れるどころの騒ぎではない。家がぶつ壊れる。

俺がダイニングの壁に背を預けてそんな事を思つてゐるリリーが思い出したように姿勢を戻し、頬杖をついた。

「てかさあ口ア。明日なんだけど……」

「わかつてゐよ。街の外の仕事だろ？」

リリーが一瞬眉間にしわを寄せた。そして俺の目を見つめてくる。俺もリリーの青い瞳を見つめた。

この習慣はいつから付いたのだろう。リリーがいつもこうして最終確認をするのだ。

『元気なこいつ』
『俺が壊れなこいつ』

ちょっとしてリリーは澄んだ青の瞳を伏せて唇に笑みを浮かべた。

その危なすぎる雰囲気をまとった笑みに俺は一瞬ひるむ。

「ま、あんたがおかしくなつたら殺す氣で行くから」

久しぶりに聞いた言葉に俺は思わずひきつった笑みを返す。

「そ、それは勘弁してくれ……」

「16やそこらで死ぬのは止めんだ。」

俺の言葉を聞いて笑つたリリーにつられて俺も笑つた。

俺は、リリーや父さんがいれば壊れないで済む。だつてこいつして

俺に時間をくれるから。

俺たちの笑い声はダイニングを埋め尽くして、下の階のルイスに

「つるやー」と言われるまでやまなかつた。

まだ日は顔を出していない。だが、もうじき鳥が鳴き、日が出て、夜が終わるだらう。

自分のベッドに腰をおろし、部屋の東側に作られた窓の外を見て俺は欠伸を噛みしめた。

「なんでこんな早い時間に仕事に行かなきゃいけないんだよ……」思わず愚痴るが聞く者は誰もいないだらう。

ちなみに俺の部屋の左側はルイスの部屋。右側はリリーの部屋。たまにリリーの部屋から何かが落ちるようなドサッ…って音がする時がある。

その日には決まってリリーの機嫌が悪い。いつだつたか忘れたが何があつたのか聞くと、

『落ちた。頭打つた』

なんて返された記憶がある。

……リリーは寝ぞう悪いからなあ……

俺たちの部屋は大体同じ構造だ。だからベッドとか、クローゼットとかは同じ。もともとあるこのベッドは大きいとは言えないが一人が寝るには十分すぎるくらいの広さだ。それにリリーは小柄だし、このベッドならある程度寝返りを打っても落ちない。

だいぶ小さい頃にリリーを起こしに部屋に行つたら布団からブランケットから全部ベッドから落ちているといつあり得ない光景を目にしたことも記憶にある。

なんでこんな昔を知っているかと訊つと、俺とリリーは5歳から6歳くらいの時に出会つているからだ。

正直はつきりとした記憶はないが、父さんが「リリーシャがお前を連れて来たんだよ」とつて言つていた。

そう。俺は親がない。『孤児』だ。ちなみにルイスとマイスは親がいる。何でも二人は出稼ぎに帝都にきているとか。リリーは知らないが、父さんとリリーと共に通点は見つけられないからたぶん孤児なのだろう。

ま、親がいようといなかるうとあんま関係ないけど。

「ロアー？ そろそろ依頼主さん来るー」

ドアの外からリリーの声が聞こえて俺はハツとした。

「あ、ああ！ 今行くー」

寝ているであろうルイスたちを起さないよう俺は小さく、しつかりと返して立ち上がった。

そしてクローゼットから愛用の剣を取り出し、背に背負う。

これでいい。準備はできた。

俺はふう、と一息ついてドアを開いた。ドアの先には短剣をベルトに差し込んだリリーが待っていた。

「さ！ 久しぶりにお金になる仕事だよ。張り切つて行こー！」

「おー」

天井に向かつてこぶしを突き上げたりリーに合わせて俺もだらりと腕を突き上げた。

今日の仕事は隣町 と言つてもこのセカイは街と街が離れて築いてある。土地はその國のものだけど、街道沿いに集落はほとんど見当たらない におつかいだ。

依頼主は帝都のちょっとお偉いさんらしい。

政府の人とか何とかつて父さんが言つていたような氣もするが、俺たち傭兵は雇われればなんでもする。雇い主が誰であるとかあまり気にはかけなかつた。父さんはそうもいかないんだろうけど。

ちなみに仕事の内容は、『隣町の町長に届けもの』と『魔物の発生状況の調査』だ。

届けものは傭兵の仕事じゃない、なんて思ったが仕方がない。

「さて、そろそろ出発しようかっ！」

リリーがぐ、っと背伸びをしてに、と笑う。

久しぶりに街の外に出るから楽しみなのだろう。

俺は少し唇の端に笑みをたたえながら荷物を入れるためのポーチの中から地図を取り出してリリーの目の前で軽く振つてやる。

「出発すんのはいいけど、地図に従つて行つてもうつからな～？」

「う……」

リリーは方向音痴でかなり行動派で、しかもおっちょこちょいだ。

……なんとも最悪な組み合わせだけど

だから必然的に俺は地理に強くなつた。相方がこれじゃあ俺が頑張らなければならぬ。

俺は小さく息を吐いてリリーの背中をトン、と叩いた。

「さ、改めて出発しようぜ。早めに仕事終わらせてルイスとマイスに新しい仕事押し付けてやる」

「それさんせー！ てか、なんであたしらが今日の仕事受けなきゃなんないのよ。三日連続とか……給料増えるかな？」

少し目を伏せて顎に人差し指を当てた姿は儂げな美少女だが、言つてることとのギャップが強すぎる。しまいには「一気に10万くらいくれないかなー」なんて言い出した。

そんな相方に俺は少し目を伏せて肩を落とした。

「しゃべんなきゃかわいいのにな……勿体ねえ……」

隣町に行くまで何事もなく俺たちは街の門をくぐつた。帝都に比べればかなり規模の小さい町だけど、ここもそこそこ栄えていたりする。この町の産業は主に木材を売つたり、山から採れた食材を売つたりだ。

陸地と海との面積比的に海のほうがでかいこの世界にはあまり山がなかつたりするため、山の食材はかなり貴重だ。そのため、高値で売れたりする。

懐かしそうに田を細めながら隣を歩く相方に知らず知らず笑みがこぼれた。

俺よりわずかに背の低い彼女は俺の目線からだと丁度きれいな銀髪が見える。

歩くたびに光を受けて輝く髪に俺は懐かしさを覚えずにはいられない。なぜだろうか

「ちょっと、何？ あたしの髪になんか付いてる？」

「へ？ あ、いや何でもない。相変わらずさらさらだなーって」

「は？ 何ソレ」

呆れたように横目で俺を見るリリーに今度は苦笑いが浮かんだ。
……ほんと、しゃべんなきゃ美少女なのに。でも、そんな面があるからリリーなのかもしれない。

肩をそろえて住宅街の真ん中に作られた大通りを歩く。立派な石畳のこの道の先に、町長の家がある。前にも何度も来ているので怪しまれることはないだろう。

それにしても。

「今日は人多いなー」

俺がそうぼやくとリリーが俺を見上げて、肩をすくめた。

「そうね。まあ、それもそうよ。ほら」

「？」

リリーの指差した先をみると山積みになつた木箱があつた。箱には『マーノツト行き』と書いてある。それで納得した。

「ああ……商品を取りに来てんのな^モ」

「そーゆーこと。各地から人が来てるんじゃ多いに決まってる」

リリーはそう言つてまた歩き出す。俺は少し大股で相方を追いかけた。

その際、路地裏から誰かが見ているような気がしたが、気のせい

だと思い、そのままにしておいた。

町長への届け物の中身は手紙と招待状だった。なんでも帝都が少しごたごたしているので助けてほしいとのことだそうだ。

「そんなのワシの知ったこっちゃないわい。ワシはこの街を守ればそれでいいんじゃ。全く、帝都の政治家どもは一体何を考えとるんじゃ！」

玄関先でいきなりそう怒鳴なれて俺は今にも何か言いたそうなりリーの肩に手を置いて困ったような表情を浮かべた。そして小さく「我慢我慢」と口だけで伝える。

さつきから俺たちにあたり散らしているのはこの街、『ダーレド』の町長、グウェモさん。

腰も曲がり、杖を頼りに歩くやたらと長いひげが気になるただのじーさんなのにこの威圧感は何なのだろう。俺がまだかなり小さいころからこの人にはお世話になっているのだが、いまだにこの人の威圧感の原因は分からぬ。むかっしから何一つとして変わらないこのじーさんはいつたい何者なんだか……

「俺たちに言われても……グウェモさん

「……それもそうじやな。それにしても随分と大きくなつたもんじやのう、二人とも」

低いところから俺たちを見上げてグウェモさんは笑つた。

けれどリリーはなぜか不満そうに それでもどこか楽しげに首を振つてみせる。

「そんなことないよ、おじい様。ロアは男のくせにちひきいし
「な！？ なんだよそれ！？」

俺の手をさつと払い、にかつと笑つたリリーに俺は思わず反論の言葉を返していた。

確かに俺の身長は160で止まつたけど…… 気にしていることを

「がはははは！　」リヤ 一本取られたわい。のひ、ロア」

「……そうですね」

肩を落とし、ため息をつきながら俺はそうつぶやいた。
なんでいつもこうなるんだ。

一人複雑な心境をした俺を横田で見ながらリリーが「まあまあ」と俺の背中をたたく。もちろん、唇には笑みをたたえて。
この行動に絶対反省の心は込められてねえな……

そんな彼女に、もう一つため息。

目の前には大口開けて笑う老人、隣にはにやにやと口元だけに笑みを浮かべている相方。

この状況を前にして、俺はいったいどうすればいいのだろうか…
…とりあえず、返事だけは貰つておかないとな。

俺は空気を変えるように手をパン、と打つた。そして少しばかり姿勢をたたず。するとさつきの陽気な空気は一変。変わつて流れてきたのは少しばかり緊張感の含んだ空気だった。

「ダールド町長、グウェモ殿。返答をお聞きしてもよろしいですか？」

「……ふん。そやつに云えよ。『ダールド』は手を貰すほど暇ではない」と

「おじい様、そんなこと言つちやつていの？　思いつき喧嘩腰じやん」

思わず口をはんだリリーに視線を滑らせたじーさんはふふん、と鼻で笑う。

「大丈夫じゃ。騎士団はもうおらん。政治家に騎士団に後れをとらん強者を集める余裕などないじゃん」

「その通り」

俺は姿勢を崩し、腕を組んで頷きながら続ける。

「政府は無駄な争いはしない。騎士団がいない今、戦争をすれば駆り出されるのは俺たち傭兵だけじゃない。民間人の男たちだつて

そんなこと

巻き込まれるんだ。そうしたら一気に信頼をなくすしな」

「…………ほどい、やめんなな……政府なんて、帝都の治政をやつして
ればいいのよ。」

頭を抱えたリリーがそう吐き捨てる。

リリーは考えることが嫌いだ。性格にそれが表れてる。だからだ
ら、リリーの魔術が広範囲に一気に攻撃を仕掛けるものが多いの
は。

以前の戦闘の際に彼女が放つた魔術を思い出して俺は思わず肩を落とす。

事

『魔物の発生状況の調査』

「こういう仕事は一番面倒だ。普通なら研究家とかがやる仕事だが、今帝都の研究家は留守にしているらしい。だから、俺たちに回つてきたつて話だ。

仕事があることはものすごく有り難いが、政府側から回つてくる仕事は大体傭兵の職とは関係ないものばかりだつたりする。それでいて面倒で厄介なものが多いから本当に大変なんだ。

俺は小さく息を吐き、次の仕事を思つて肩を落とした。

「あーあ。結局こっちの方が結構地味なんだよねー……めんどくさ」

「仕方ないだろ？俺だつて嫌なんだから」

「魔物が出てきたらロアは引っ込んでいいわ。あたしが何とかするから」

グウェモさんの家から出て少し狭い路地裏を歩いて行く。ここを抜けると今回の調査の対象となる魔物が現れる場所へと通じるのだ。俺は強気なリリーを横目で見てからかうようにリリーの肩を小突く。

「リリー一人に任せて俺が無傷でいたことあったか？」

「う……」

いつもリリーが一人で突つ走つてしまつと大抵俺にまで被害が及ぶ。もしかしたら俺が戦つた方が怪我しなかつたんじやないかなんてこともしばしばある。まあ、最近は減つては来ているけど。

思わず言葉に詰まつたりリーの背中を軽くたたいて俺は笑つた。

「大丈夫だつて。リリーがいれば」

「……あたりまえじやない。あんた一人に手柄なんてとらせないんだから」

唇を尖らせてキッと眉間にしわを寄せたりリーの言葉に俺は感謝した。リリーさえいれば、俺はきっと壊れない。……ただ、最後の言葉は余計だな。

やつと狭い路地裏から広いところに出た。街の外に抜けたらしい。周りは木々に覆われ、木漏れ日がきれいだな、と思つた。

「さて……」

俺は背から荷物を下ろし、強引に手を突つ込んで『例のもの』を

引っ掴んだ。

俺のつかんだものを見て、リリーは首をかしげる。

「これ……何？ うわ、何このこおい！？」

俺がとりだしたちょっとした缶に顔を近づけたりリーは慌てて鼻を覆う。

俺には何の事だかわからず、

「え？ そんなに酷いにおいか？」

とこつちが首をかしげる番だった。

「こえにやんにやの！？」

「ん？ 魔物の生態を知るために使う餌みたいなもんさ ああ、こ

れ酒の匂いすんのな」

「あひやし、おしゃけによめこやのよー」

「何言つてんだか分かんねえよ」

涙目になつて唸つているリリーを見て吹き出しそうになり、俺はなんとか堪えた。

「こいで吹き出してしまえばリリーの逆鱗に触れてしまつ。それは一番厄介なことに違ひない。」

とりあえず一度息を吸い込んでそれから餌を少し開けた草はらに放り投げる。

匂いがしなくなつたのかリリーはやつと鼻から手を離した。

「うう……こんなのが好きだなんてだいぶ変わつた魔物ね……」

「まあ、人間も飲むしな。不思議なことでもないさ」

「あたしは嫌いなの！…」

「はいはい」

涙目になつて迫つてくる今日の相方はちよつとかわいい。いつもこうならしいんだけどなあ……なんてな。

そんなことを考えているとリリーがす、と俺が放り投げた餌の方へ目をやつた。そして俺の腕を引いて木の裏へと隠れる。

「な、なんだよ 」

「しつ！……誰かいる」

「へ？」

珍しい。リリーが俺より先に何かに気がつくなんて。

「…………」

す、と大きな目を細めてその目に捉えた相手を見つめるリリー。ここは視力のいい相方に任せた方がよさそうだ。

一人して息を殺し、茂みの奥へと意識を集中させる。少しして、茂みが動き出した。

「…………」

現れた『モノ』に思わず顔を見合させる。なぜならそこに立っていたのは『少年』だったからだ。

「子供じゃんか」

思わず肩をなでおろし、息を吐いた俺に対し、リリーは拍子抜けたように口を開けていた。

少年は恐らく十一歳くらい。茶褐色の髪と紅色の大きな瞳が印象的だ。

「だ、誰かいるんですか！？」

おびえたように声を上ずらせて声を張る少年。見ればきょろきょろとあたりを見回している。

なんでわかつた？ 俺の声、そんなにでかかつたか？

「どうするリリー」

「……ねえ、あれ見てよ。あの子の腰」

リリーは俺の質問は全く無視し、少年の腰を指差す。半分飽きれ、半分諦めて、俺は少年を見やつた。

距離が遠く、少年の腰に何があるのかまでははつきりとわからないうが。

「 銃？」

「そう。あの子供、あたしたちみたいな傭兵なのかもよ」
さすがだ。俺には見えなかつたモノを完璧に見ている。やつぱり、リリーの視力は半端じやない。

そんなことを考えて、いるとふいにリリーが俺の頭に手を置いて下に押した。しかも思いつきり。突然のことすぎて対応すらできず、俺はそのまま地面に顎を打つてしまつた。土と小さな石がやけに痛い。

「な、何すんだよつー?」

「出た」

「え?」

リリーの脣からこぼれた言葉に俺は眉を寄せた。まだリリーの手は俺の頭にある。その為動けずにいた。下手に動くといひいう危ない。リリーの姿勢がいろいろ危ない。
だから俺は動かずにつだ固まつていた。だが。

「!?

森の中に響いた銃声に俺は無理やり頭をあげた。もちろんリリーは体勢を崩して尻もちをついたらしく、背中に「何すんだよー?」と非難の声が飛んできたから。

でも、そんなことを気にしている場合ではない。

「さつきの銃声は――」

俺の目に映つたのは銃を構える先ほどの少年と魔物の姿だつた。

「口ア、わかつてゐよね?」

いつの間にか立ち上がりつたらし、リリーが片膝をついて動かない俺の耳元でささやく。

それで一瞬飛んでいた意識が戻つてきて、俺は頷いた。

「……大丈夫。わかつてゐよ」

その答えを聞くとリリーは俺の隣に膝をついて様子を窺つ。

「どうする? 下手に出ていくと撃たれるよ」

忠告と言わんばかりにリリーは釘を刺してきた。確かに、危険極

まりない。

「なんことわかつてゐるさ 」

そんな事を話している間にも森に銃声は響き渡つてきて魔物が次々と倒れる。

少年の銃の腕は半端ではなかつた。本当に子供か ？ そう疑つてしまつほどだ。

魔物を避けながら、飛びながら、走りながら弾を撃ち込んでいく。だが、威勢良く響いていた銃声が突然止まつた。

「 弾切れかつ！？」

俺の言葉に素早く反応したリリーは手で構えをとつて詠唱に入る。隣で魔術を唱え始めた相方に俺も思わず参戦してしまつた。

「 あた……れ！」

荷物袋に入れていたナイフを魔物に向かつて咄嗟に投げつける。魔物に向かつて真つすぐ飛んだナイフは少年の頬を掠め、魔物の目に突き刺さつた。

「 ぐあああああ！？」

醜い悲鳴をもらしながら葉のついた枝で目を覆う魔物。確かにいウツヅ・ゴーストつは樹靈ウツヅ・ゴーストだつたと思う。木のような姿をしながら木ではない。目があり、根で動き、枝で攻撃してくる。

負の思いが枯れかかつた木に宿り、魔物と化したんだ。

「 だ、誰つ！？」

少年がナイフの飛んできた方を振り返るのとリリーが詠唱を終えたのはほぼ同時だつた。

「 さあ、行くわよ ！！」

構えた彼女の指先から現れたのは炎でできた無数の矢だつた。

その矢は少年を襲つていた樹靈に突き刺さるとその後ろにいた物にも突き刺さり、炎で燃やしていく。

「 ぎやああああああ！！」

何体もの魔物の声は空高く響き渡り 消えた。

魔物を倒した俺たちは何とか残つた足跡を書き[写]し、その死体が消えうせる前にいろいろと調べて森を抜けた もちろん少年を連れて。

街に入り、広場に来たところであつと少年が口を開いた。

「ありがとうございました……僕、替えの弾持つてくるの忘れちゃつて……」

「……馬鹿じゃないの？」

「こら……」

冷たく少年を見下ろすリリーを窘めたしな、何度も頭を下げる少年に訊いてみた。

「なんであんなところに一人でいたんだ？ 街の外は街道以外魔物が出るつて知ってるだろ？」

「僕、人を探しているんです。それで、道に迷っちゃつて……」

「人？」

ずっとそっぽを向いていたリリーがやつと少年に向き直る。

少年は頷いた。

「はい。帝都で傭兵をやつている『ディオ』という人なんですがどう

」

「父さん？」 「父さん？」

思わず声を合わせて言つた俺とリリーを見て少年は目を丸くした。

「父さんって、どういうことですか？ あの、お兄ちゃんたちはディオさんを知つていいんですか！？」

いきなり詰め寄つてきた少年に思わず後ずさる。俺は曖昧に頷いた。

「ああ。ディオは俺たちの父親 つていうか社長だ」

「へ？」

拍子抜けしたのか少年は首をかしげている。
リリーが見かねて説明した。

「だから、あたしたちは『ディオのもとで働いてるのー』でも、小さい時からもうだからあたしたちは『父さん』って呼んでるのよ。
『そりだつたんですか……』

納得したように頷いた少年に今度は俺が尋ねる。

「で、なんで父さんを探してるんだ？ 仕事？」

「違います……僕、家族が最近死んじゃって、親戚の家に引き取られていたんですけど、その親戚も僕の面倒を見切れないからって親戚の家をたらい回しにされていたんです。でも、少し前に『ディオさんから手紙が来て……あの、僕とディオさんが親戚らしくて……』
「えつ？ 父さん、親戚なんていったんだ？」

「そりやいるだろ……」

思わず突っ込む。たまにリリーは抜けているところがあるからな

あ……

俺は一つ息をつき、少年に向き直った。

「じゃあ、行く場所は同じなんだし、一緒に行こうか。 名前は

？

「名前 僕ですか？」

「あんた以外に誰がいんのよ」

厳しい指摘をするリリーに苦笑いを送り、俺はもう一度少年を見、頷いた。

少年はそれに安堵したのか背筋を伸ばし、はきはきと歩きだす。

「僕はクレイといいます。よろしくお願ひします！――

森の中で会つた不思議な少年『クレイ』ははるか北にある街が故郷だといった。

傭兵、と言つても俺たちは近場の場所しか知らないし、行かない理由は簡単だ。帝都とはいえども、貴族が集まる貴族街と市民街ではわけが違う。俺たちは市民街の傭兵だ。仕事を依頼してくるのは市民たち。貴族や政府の人間が俺たちを雇つてにすることは最近では珍しい。

まあつまりは、市民が頼む仕事なんてたがが知れていて、だから遠出はしないということ。

三人肩を並べて街道を歩いていると不意にクレイが口を開いた。

「あの、ロア兄たちは、傭兵さんなんですか？」

「そうだよ。まあ、今は傭兵の仕事なんてほほやつてないに等しいけどな……」

クレイはびしづやり傭兵に興味があるらしい。まあ、あれだけ銃が使えば申し分はないけどな。

「あんたさあ、どこで銃なんか覚えたの？ 子供が覚えるようなもんじやないでしょ」

俺の右隣を歩いているリリーが俺を挟んでクレイに問いかける。確かにリリーの質問は俺も引っかかっていた。

クレイは少し首をかしげて記憶を引きずりだすようにうん、と唸りだした。

「……よく覚えてません……たぶん、お父さんだと思つのですが……」

「もしかして物心ついたときから銃握つてましたってわけ？ す『いね～』

半ば疑うような口調で肩をすくめ、クレイを横目で見たリリーに俺は思わずため息をついた。

リリーはこんな風に子供だろうが大人だろうが容赦はしない。ある意味すごいことだが、ある意味では悪いところでもあるだろう。今もそうだ。言葉の端に現れた刺を隠すこともなく表に出している。普通の人間であれば顔をしかめて機嫌を害するところだろう。だが、クレイは逆ににっこりと微笑んで頬を赤らめた。

「そ、そうですか？　ありがとうリリー姉」

「…………」
意外な言葉に面を食らったのかリリーは瞬きを何度もして困惑したように俺に視線を送ってきた。俺は苦笑いを返してリリーに耳打ちをする。

「…………クレイは相当世間知らずで天然みたいだ」

「…………そづね」

帝都に戻るまで俺とリリーはクレイから何度も質問を受けていた。「どんな所で働いているのか」「帝都はどんな所なのか」「ほかに働いている人はいるのか」……質問の嵐だ。家に戻った時にはしゃべり疲れて帰つたことを報告するのさえ億劫だつた。

「たつだいまー」

俺の代わりにリリーが家中に聞こえるように言う。

日も傾き、赤い光が窓から差し込んで部屋の中を照らしだす。まだ電気はつけていない。それも手伝つてか部屋は真っ赤になつていた。

少しの間シンとしていたがたつたと階段を下りて出迎えてくれたのは父さんだつた。

「おかえり。お疲れ様　ん？　君は…………」

父さんは俺とリリーの間に立つ少年に手をやる。
クレイ

視線を受けたクレイは背筋を伸ばし、体をこわばらせた。

「あ、あのー！　僕、クレイですー！　お手紙、あ、ありがとう」

ざいました！！

つつかえながらなんとか自己紹介をするクレイ。その様子を呆れたように横目で見つめてリリーはせつと部屋に戻つて行つてしまつた。

つたく、まだ仕事が残つてゐるだつた。

「ロアも疲れただろう？ 少し休んできなさい。報告は夜に聞くから

「あ、うん。ありがとう父さん」

きつとさつさと帰つてしまつたリリーへと送つた俺の視線に気がついたのだろう。父さんはそう言つて俺に微笑むとクレイに視線を送り、椅子へ座るように促した。

父さんとクレイが一人で椅子につくのを目の端に捉えながら俺はドアノブを回し、応接間を後にした。

「え？ 子供？」

俺が部屋で剣の手入れをしているルイスが部屋に入り込んできた。

「どうかりと俺のベッドに腰かけ、そしていつもの『美人さんはいたか？』というどうでもいい話を持つてこられしぶしぶ経緯を話していると口挟んできたのだ。

口を挟んできたルイスに少しムツとし、俺は剣を鞘に戻しながらうなずいた。

「そう。子供。父さんの親戚らしいぜ」

「へえ……社長のねえ」

「なんだよ、疑わしいような顔して」

変に顔をゆがめたルイスに俺は首をかしげた。ルイスはうーんと腕を組み「だつてさあ」と呟いた。

「社長つて家族構成とかよくわからんくね？ てか家族いんのかあ

の人。もともと若いころから傭兵でいなやうじやん

「おい、俺とリリーは血はつながってなくても父さんと家族だ」

「つとわりー」

けらけらと薄く笑つたルイスに俺はさりとめつとした。

……こいつと話しているもののすこいらつく。

俺が椅子に座つて頬杖をした時、丁度開け放たれた俺の部屋の前の廊下をマイスが通つた。

「あれ、一人で何話してんだ？ 珍しいこともあるもんだな

「ルイスが勝手に入つてきたんだよ」

「勝手にとかひどくねー？」

ベッドの上で脣を尖らせたルイスの正面の壁に背中を預けてマイスは腕を組んだ。

「うーん、姿はそつくりなのにマイスとルイスじやこいつも違つんだな。ルイスが腕を組んでいるとなんだか締まらないが、マイスが腕を組むと紳士的に見える。

……田じりの行いの違いだな……

「で、何の話をしてたんだ？」

マイスが俺に視線を送つてきた。

「あー、子供を預かることになつたんだよ。子供」

「子供？」

「そう、子供」

マイスが驚いたように目をみはるとルイスがくすくすと笑いだした。

「俺たち、子守係かもしれないぜ？」

「クレイはそんなにガキじやねーよ」

「クレイつていうのか？ その子供」

マイスの言葉に頷いてみせるとマイスはふーんと頷いた。

ルイスは俺の「そんなにガキじやない」発言に少し驚いたような顔をする。

そしてベッドの上に胡坐をかき、俺に質問してきた。

「何歳ぐらいの子供なんだよ」

「12歳とか言ってたぜ」

「結構でかいじゃん。なんだ、つまんねーの」

意味がわからねえ……

そういうえばルイスは子供をいじるのが大好きで、よく小さい子を泣かせていた。

……今回はそろはいかないからな。何せ父さんの親戚つてことは戸籍上俺たちの親戚つてことになるわけだし。さすがにそれはなんかむかつく。

「ええ!? クレイを働かせる!? 嘘でしょ!?」

夕食の並んだ食卓で非難の声をあげたのはリリー。

食卓に全員がついたのを確認してから告げられた父さんの言葉に納得がいかないとでも言つよつてリリーは父さんに詰め寄る。

「だつてまだ子供だよ!?

「リリー・シャ」

父さんのやんわりとした口調に遮られ、リリーは押し黙った。その表情は困惑がいっぱいだ。

正直、俺はこうなるだろうなあと思つていた。今、メルスタリオンは人手が少ないので、実際俺たちもクレイよりも小さいころから仕事を請け負つてきた。

そう、つい最近 一年ほど前に終わった戦争の時も俺たちは兵士として参加していた。

一年前だから 14の時か。

「私はクレイの腕を見込んで話しているんだよ。さつき、小手調べに魔物を倒してきてもらった。見事な銃の腕前だ」

父さんは満足そうに頷きながらそう話した。

「へえ、お前銃使いなんだ?」

「あ、は、はい」

ルイスの好奇心を唸んだ田口クレイは少ししひるんだようだ。
そんなクレイを見てマイスが呆れたよつこため息をつく。

「おいルイス。クレイがビビってるだろ?」

「び、ビビってないです!!」

必死に弁解するクレイ。ああ、あれじゃアルイスのおもちゃだな

俺はそんなことを思いながらふと田の前の席に座つてこいるリリー
を見た。

彼女は今までに見たことのないような表情をしている。
どうしたんだ?

わからないまま俺は小さく首をかしげた。

何かがおかしい。俺はそう思いながら相方の背中をぼうっと見つめていた。

今までに見せたことのない表情。

気になる。とくに気にしたことなどなかつたけれど、今回はクレイのこともあるし、なんだか気になる。

（後で聞いてみるか）

俺はそう決め、テーブルに頬杖をついて窓の外を見やつた。外は闇で覆われている

「リリー」

「……何？」

不機嫌そうな声。

食器を洗い終わつたリリーの後を追つてみると、屋上に着いた。

リリーは屋上で星を見るのが好きなのだ。

俺は階段の最後の一段に足をかけ、リリーを見る。

この角度からではリリーの表情は全く見えない。ただ、星明りに照らされている綺麗な銀髪が淡く浮いているように見えた。

屋上の真ん中に膝を抱えて座つているリリーは星を見上げているようだ。

「隣、いいか？」

「……いいよ」

そつけない返事で返される。

俺は内心ため息をつきながらリリーの左隣に腰を下ろした。そして胡坐をかいて左ひざに肘を乗せてリリーの顔を見る。

やつぱり『あの表情』をしている。膝の上に顎を乗せ、少しだけ

唇を尖らせたリリーは俺を全く見ない。

「リリー」

「何」

「なんでそんな顔してるんだ?」

「……は?」

リリーは拍子抜けしたような声をあげた。そして俺の顔を見て、自分の顔に手を当てる。

「あたし、そんな顔してた?」

「うん。してた」

しばらぐリリーは顔に手をあてたまま固まり、そしてやっと息をついた。

息をついた後、リリーは目を少し伏せて俺から視線を外す。
「単に、子供が嫌いだからってわけじゃないだろ?」

「……別になんでもない」

そう言い捨てるにスッと立ち上がり、家の中に戻ろうと少し乱暴に歩き始めた。そんな相方の手首をつかむ。掴まれた反動でリリーは後ろによろけたが、次の瞬間には俺をすくい形相でにらんでいた。

「何すんの」

「何つて。はぐらかさないで言えよ、リリー」

「はぐらかしてないっ!」

俺から逃れようと必死に腕を動かそうとするが、そこは女。力で俺に勝てるはずがない。

掴まれたまま今度は上目遣いでにらんできた。

「……誰にも言わないでよ」

「俺が『言つたな』って言つたこと、誰かに『言つたことあるか?』

「……」

呆れたように言つた俺にリリーは視線を外して少しムッとした。

「言つから離せ」

「言つたら離す」

「はあ!?」

「いいから言えって」

掴んだ手は離さないまま、俺は力だけを緩めてリリーにやう促した。

風が冷たい。やつと春になつたばかりでまだ冬の寒さを含んでいる。冷たい風に少し身震いしたリリーは俯きながらぼそと呟いた。

「クレイはまだ子供だから……なんか……父さんが捕りれるような気がして……」

「は？」

「だから？」

思わず拍子抜けして出た声にリリーは俯いたまま声を荒くする。その顔は先ほどまで寒さで震えていたとは全く感じさせないほど真っ赤になり、銀髪からのぞく耳まで赤くなるほどだ。

「だから……寂しかつたつて言つてんの……！」

そう言い放つた相方はついに恥ずかしくなつたのかへなへなと座り込んでしまい、掴んでいた腕を離した。

俺もリリーの顔を覗き込むようにしてしゃがみこむ。

「……こつち見んな」

「なんでそんな恥ずかしがるんだよ」

「だつて……やきもちなんて、子供にやきもちなんて……馬鹿みたいじゃん」

リリーは俯いて頬に両手をあてて絞り出すよつに話しだす。

「ロアは小さいころから一緒にいたから、別に何とも思わなかつた……でもなんか、新しい家族が増えると思つと……不安でさ」

「わかつたわかつた」

まだ顔の赤いリリーと向かい合わせで俺は胡坐をかいて一カツと笑つてやる。

リリーが上目遣いで見上げてきた。

「父さんはみんなの父さんだ。マイスやルイスだって血は繋がっていないけど家族じゅん？ だから、リリーがやきもち焼くくらい不安

になる」とはないんだって。だってリリーは父ちゃんの娘だろ?」「

「…………」

リリーも胡坐をかき（ただ、短いミニスカートの裾は抑え込んで）「ぐんと小さな子供がするような顔き方をした。

ふわりと風が吹く。さっきまでざわざわと心地いいとは言えない風が吹いていたのに今の風はさらりとしてすがすがしくなった。冷たさはあるが、酷く寒い風ではない。

リリーが不意に空を仰ぐ。俺も同じ様にした。

無造作に空にばら撒かれた星たちが淡く輝いている。

「明日も晴れるね

「そうだな」

そんなたわいもない話をしながら明日からはじめるかと心の中で気合を入れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5747s/>

僕らの誓い

2011年10月14日03時12分発行